

．．．折中五五之．．．
．．．明大尉聘取．．．
．．．皇上頌德群．．．

皇明折
中
大
五
五
之
取
羣

「落ち穂拾い記」 「鮮于璜碑・初拓本」続

⑧〇

図1



図2



図3



図5 碑陽の枅目にみる文字布置



図4 碑陽(右)と碑陰(左)の文字の大きさの比較



碑陽

碑陰



最近、ネット環境も非常に便利になり、新出土の碑刻情報を検索すると、多くの画像を見ることができ、以前から気にしていたことがあるが、この「鮮于璜碑」の原碑の状況を確認できる情報を全く見ることができない。天津博物館の展示にも原碑らしきものが示されているが、原碑でなく、拓本を基に制作されレプリカ風のものである。以前から言われている事であるが、原碑が長く地中にあったために石質が、破損し建碑することが不可能であると。以前、先輩の書道家・鬼頭墨俊氏から1982年に原碑を見学したことをお聞きし、当時の日本書道美術院の機関誌『書道美術』(1982年11月号)に飯島太久磨氏の見学記と原碑写真が紹介されている資料をいただいた。太陽光が差し込む収蔵庫の廊下らしき所に、太い横木を二カ所におき、その上に碑陽を表にして横に置かれた原碑(図1)、また碑を建立して安定させるための碑の台座(図2)、さらに碑の上部の円い穿の下の碑文写真(図3)が示されていた。太久磨氏は、碑文の刻が浅く、また碑の下部や碑の台座が、湿度で相当に風化が進んでいると記されている。家蔵拓本の台座に接する部分は不思議な拓調を示し、上部の碑面と状況が異なる。その故か下部を丁寧に拓されていない拓もある。ここに紹介させていただいた鮮于璜碑の原碑の写真は、大変貴重な写真といえよう。

次に前回紹介できなかった碑陰の書を碑陽と比べてみよう。前回示した両面の並列図版で確認できるように碑陽の方が、行数、1行あたりの字数も多い。両面とも縦横の野線が刻されている。碑陽の方がはっきり見ることができ(前号の右頁の主図版参照)。碑陰は同じように原寸大の図版を右頁の主図版として示した。野線を明確には見ることができないが、拓本全体を仔細に窺うと細い野線の一部を確認することができる。正確に一字分の大きさを計測すると碑陽は、縦横4.5cm、碑陰は、縦横5.0cmの大きさの正方形に区画されている。碑陰の文字がやや大きいのは、野線の区画に因るのであろう(図4)。碑陽の文字の布置は、正方形の枅目の文字の上部に合わせるようにして書き始め、下部の空間は文字の字画の粗密に合わせ、画数の少ない文字などは、正方形の平面の下部が大きく空いている(図5)。碑陰は、碑陽とやや異なり、枅目の中央に正方形に応じるように布置されている。碑陽はやや謹厳な趣であるが、碑陰は文字も大きく、やや伸びやかな風を感じさせる。現存漢碑の優品であろう。(★解説文の原碑写真は、日本書道美術院の機関誌1982年11月号の図版を使わせていただいた。)

伊藤滋(書斎名・木鶏室)

書のひろば

理事長 下谷洋子

第77回毎日書道展開催

第77回毎日書道展が開幕しました。
今回は大幅に鑑別審査日程が変更になりましたが、大きな問題もなく順調に日程が進みました。

鑑・審査は5月末、会員賞は6月26日(台風のため一日繰り上がる)、文部科学大臣賞は28日に決定しました。

- ・文部科学大臣賞
- ・柳澤朱篁氏(漢字部)
- ・会員賞(本院関係)
- ・森田藤谷(漢字部)
- ・寺尾京華(近代詩文書部)
- ・東京展イベント

- ・会員賞受賞者による席上揮毫会
- ・毎日賞受賞作品解説
- ・毎日書道会理事・監事によるギャラリートーク(本院関係)
- 7月15日 室井玄鸞・柳碧薺・小竹石雲
- 7月22日 下谷洋子・大谷洋峻
- ・「書の甲子園」作品展示に伴う連携企画
- 「選抜高校野球大会」出場校のプラカードの展示

地区優勝校が揮毫した同野球大会開会式で使用したプラカードの実物展示。

○作品鑑賞会「毎日展作家と書を学ぼう」

表彰式

7月19日午後12時半よりザ・プリンスタワー東京「コンベンションホール」にて、盛大な表彰式が開催されました。受賞者・来賓・役員等約900人でした。式に先立ち、本年度毎日書道顕彰や俊英賞を受けられた先生の顕彰授与が行われました。

祝賀会

コロナ禍以降7年振りとなる祝賀会が表彰式後同会場で行われました。1,000人ほどの役員・出品者で会場は埋め尽くされ、どのテーブルも弾んだ会話が湧き起こっていて、毎日展ならではの光景でした。

書道芸術院出品者懇親会開催

毎日書道展祝賀会の後、17時より芝パークホテルにて本院の毎日展出品者懇親会が開かれました。150人の出席者は受賞者を中心に、これも本院らしい和気藹々と賑やかで開放的なひと時を楽しみました。

来年も皆さんのご健闘を祈ります。



懇親会



表彰式

「次世代をになう準たち」展開催

7月14日～19日、セントラルミュージアム銀座にて書道芸術院の50～60代の作家16人による「次世代をになう準たち」展が開かれました。全員毎日書道展審査会員、書道芸術院審査会員です。一人6mの大壁面を、2～3点で自己を表出するという本院でも初めての企画でした。(P45～47参照)

結果は、本院の5部門の大作が堂々と並び圧巻の会場となりました。個々の作品には未熟な点もありましたが、各人の書に託す熱い思いが溢れているように思いました。また、会場では出



大作の前に集合



会場風景

品者同士はもちろんですが、来場された先生方との書の交流が盛んに行われ、それこそが展覧会の持つ意義でもあり、出品者にとって恐らく今後への手ほどきにもなり得たものと思いました。



S 34. 4月随意 8級

牙えた迫力ある歐陽詢。今回出品中の白眉。



S 34. 7月随意 8級

活気にあふれて佳。



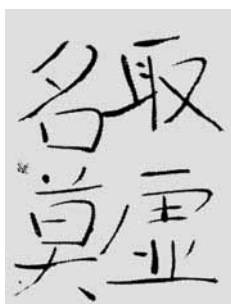
S 34. 10月規定初段

いつもながら、器用さには敬服。やや軽い。



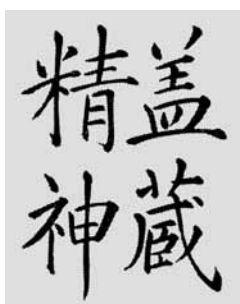
S 34. 11月臨書 5級

作品として一応成り立っている。美事。



S 35. 2月臨書 5級

筆端が鋭く、構えが大きい。出品中の白眉。



S 35. 7月臨書 5級

清く澄んでいる。さらに線の弾力を出すこと。

基礎基本講座

ペン字基礎基本講座(7)

川村美泉

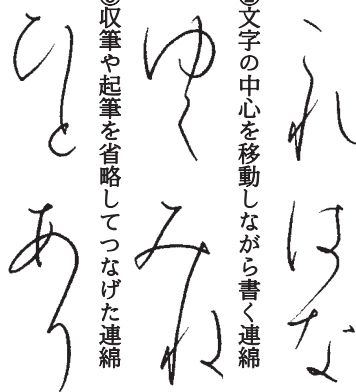
今回は「連綿」について取り上げたいと思います。ひらがなと同じく、ペン字を始めて間もない方々が難しいと言われるものです。

「連綿」とは、2文字以上文字を続けて書くことです。また、連綿の部分が実線につながった場合は形連、実際につながっていないくても筆脈が通っている場合は意連と言いますが、ここでは形連についてお話しします。連綿の方法はいくつかあります。

①文字の中心が通った連綿

②文字の中心を移動しながら書く連綿

③収筆や起筆を省略してつなげた連綿



ひらがなの形を意識しすぎると、文字と文字をつなぐ連綿線が弱くなり、勢いがなくなったりします。1文字目の終わりからすでに2文字目が始まっているイメージで、少しスピードをつけリズムをとりながら書きましょう。また、続ける部分が角々しないように柔らかに表現しましょう。

ここでは、2文字連綿を取り上げましたが、3文字、4文字の連綿もあります。多用しすぎると、読みづらくうるさく見えるので注意したいですね。

1字1字、単体で書いたものに比べると、連綿を使うと明らかに速記性が増しますし、流れ、優雅さが表現できます。自然につながやすいひらがなを使って、いろいろな言葉を連綿にして練習してください。きっと、楽しくなると思います。

古筆の美しい連綿も鑑賞し、呼吸やリズムのとり方を学びましょう。

書道芸術院

令和の群像 (2026)



第72回 (2025年) 河北書道展委嘱作家特別賞「不易流行」

小野寺 三 枝 書



小野寺 三 枝 (宮城)

「ターニングポイント」

書道の盛んな学校で小学1年の時に書き初めの代表に選ばれ、中学3年まで放課後練習の毎日を通しました。毎月の競書も学校から出品していただき、小さな成功体験の積み重ねが継続できた要因でした。

両親の言葉に耳を傾けず、自分で決めた大学受験に失敗、友達と予備校への準備をしていた頃、小学3年から習い始めた華道が高校卒業と同時に家元教授を拝受することとなり、その式典後知人から個展の案内状をいただき、高橋樹石先生(大澤雅休先生直弟子)に出会いました。進路の話をしていると「書の道を歩んでみませんか」。これが私の最初のターニングポイントになり大胆な人生の決断となりました。「古典の臨書がすべて」「本物に触れなさい」。肉筆手本はなく無我夢中で中央公論社の書道藝術全巻を求め向かい合い、18歳から書道芸術院(漢字部)、河北書道展(墨象部)への出品が始まりました。資格にこだわらない環境の中で姫野千秀さんとの出会いが次のターニングポイント。彼女はすでに教室を持って活動していましたが、宮城野書人会の羊毛の世界に魅せられて宮古から古川へ。60畳の教場で切磋琢磨、背中を押してもらいながら一緒に二十歳の春に準師範、秋には師範に合格することができました。次のターニングポイントは21歳。河北書道展で河北賞を受賞。人生の方向が決定しました。

町をあげて応援していただき、保護者の方々から「準備、後片づけをしますので子供達に教える来て下さい」。断わることもできず21歳から書道教室をスタート。40数年が過ぎました。河北賞を受賞しなかったら趣味で終わっていたはず。好きな道一本で今日まで歩んできました。奇跡としか言えません。

樹石先生が逝去され、河北書道展を10数年中断。その頃嵯峨大拙先生から「そろそろ出品したかどうか」とお声をかけていただき、社中の方々と出品、毎日展もスタート、書道芸術院は前衛部へ移籍しました。

昨年の河北書道展で委嘱作家特別賞を受賞。今表現したい心の声を自由にぶつける繰り返しをしてきました。が、嵯峨翔葉先生から「三枝先生、今回は真っ向勝負でいきましょうか」。この言葉は新鮮に心の奥に響き、新しい風が吹いたように感じました。

好気心旺盛な私は、創作活動のヒントになるものへ挑戦を続けてきました。刻する喜び、線の追求、彩色の魅力を刻字で学び、樹石先生が毎年千支版画を制作されていました。私も15年前から版画に挑戦しています。現在は伝統的型染めの奥深さに興味津々、富士吉田に通っています。

先日、宮城野書人会筆塚供養祭、相撲競書大会が開催され、孫弟子達が優勝、敢闘賞を3名受賞しました。愛弟子達の成長を見守りながら、自己成長を忘れず、誠実に新たな表現を追究していきたいと思っています。

書道芸術院

令和の群像 (2026)



第77回芸術院展「山田消児の歌」

佐藤初香書



佐藤初香(埼玉)

「書は心棒」

書との関わりは、高校入学後、飯沼恵鳳先生と同じクラスになり、誘われて書道部に入部、加藤翠柳先生との出会いからである。字を書くことは苦手な部類だったが、何も分らないまま部活動に明け暮れ、他の授業は二の次であった。先生は部員全員をいつもニコニコと優しく指導して下さって暖かさにあふれた部活動であった。

社会人になり、恵鳳先生とふたりで翠柳先生の御自宅の教室に週1回通うことがとても楽しく、教室には大勢の先輩がいて、書に対する気迫に圧倒されるほど、熱気に溢れていた。ある時、作品制作をするようになった先生から胎毛筆をお借りし、大文字で短い詩を書いた。もちろん先生から、たくさん指導していただき書き上げ、河北書道展に出品。初入選となった。

その後、仙台を離れ、結婚・出産・子育てなどで書が遠くなった時期があった。長女が病気で生まれたことと、加えて、私自身が子供時代、養女という環境に育ち、周りの顔をうかがう子どもであったが、成人してから変わらなかつたことで、子育てに悩み苦しんだためである。つい自分を責めてしまう、そんな状況が続く、そこから逃れたい書に向かうようになった。書いている時だけ、現実を忘れ癒やされ救われた思いであった。

古典を師とし臨書を続ける中で、甲骨文字にロマンを感じ、篆書・草書の筆遣いに悩み、顔真卿の生き様が文字に表れている争坐位稿などに想いを寄せ、迷いながらも、いろいろな古典の筆遣いを追求してきた。難しいことはたくさんあるが、臨書をしている時は楽しいと思う。作品制作となると、至難の業である。特に現代詩文書の制作については、基礎知識も少なかったこともあり、秋季展に出品することで表現方法を探し続けた。数年落選が続く、これで最後と出品した作品が、思いがけず菊花賞に選ばれた。平成24年である。詩文と自身の気持ちが出た。ぴったりと合っていたので、素直に書くことができた。題名は「ありがたの行き先」である。賞をいただいた時は、嬉しさより驚きの方が大きかった。

現代詩文書は無限の表現方法があると思う。それには、感性が大切。様々な経験によって培われるし、自分から行動しないと手には入らない。私自身の感性は未熟だが、多様な作品を表現できたと思う。長い時間、書とともに生きてきたことにより、物事を否定的にとらえることもなくなり、自己肯定感を持つことができるようになった。書を通して私の人生は救われたと言える。

書活動は、ひとりではできない。それには宮城野書人会の諸先生・先輩・書友の存在が大きく、また、家族が見守っていてくれたことにある。心から感謝したい。



佐茂 明祥
(宮城)

「嘉會」

この度は審査会員にご推挙いただき、誠にありがとうございます。いつも熱心にご指導下さる安藤華祥先生をはじめ、日々切磋琢磨できる書友の皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

この縁に感謝し、今後とも精進して参りたいと思います。

(明祥)



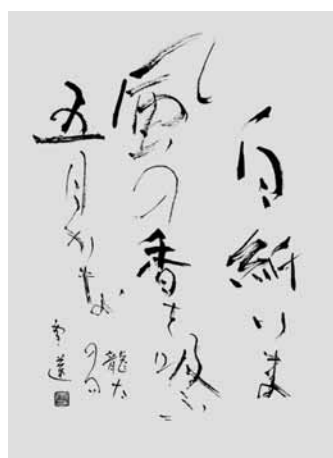
須藤 雪蓮
(青森)

「飯田龍太の句」

坂本素雪先生のご指導のもと、伊呂波書の会の皆様に支えられて書を続けて参りました。深く感謝申し上げます。

無垢な白紙が新たな言葉を待っているかのような、清々しい表現を目指しました。これから始筆の瞬間の清新な気持ちを大切に、書に向き合っていきたいと思います。

(雪蓮)



石井 和子
(群馬)

「道」

この度は、審査会員にご推挙頂き誠にありがとうございます。

これも師・大井美津江先生の熱心なご指導と秀水会の皆様のお陰とっております。

書の道は厳しく奥が深く大変ですが、これまで通り日々を大切に精進して参りたいと思います。

(和子)



本田 賀艸
(大阪)

「光禄大夫」

この度は、審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。

小林琴水先生をはじめ、春洋会の諸先生方、書友の仲間達のおかげだと心より感謝申し上げます。

この作品は、顔真卿の「顔氏家廟碑」の臨書です。顔法の特徴を学びながら、書道の奥深さ厳しさを味わい、これから精進して参ります。

(賀艸)



『書道芸術』クロニクル(6) 第26号

書道芸術

26

書道芸術院

発行日 昭和35年(1960)2月1日

編集兼発行人 印刷 総頁 価格は同じ

口絵写真 黄庭経・大唐中興頌

現代書家小品展作品7点

研究部優秀作品8点

手本揮毫

多田観山・関口虚想・岩垣翠城
加藤翠柳・高宮金陵・金沢魯水

競書成績

師範部:2名

研究部:特選9 秀作21入選20

規定部:303名(準師範・初・秀・10級)

随意部:239名(準・二・初・秀・10級)

臨書部:136名(準師範・特・10級)

条幅部:77名(準師範・二・10級)

篆刻部:10名(1級+7・10級)

競書短評

研究部11名(写真版は口絵に)

規定部31名(写真版は18名)
随意部43名(写真版は18名)

臨書部31名(写真版は10名)
条幅部15名(写真版は6名)
篆刻部6名(写真版は3名)

記事 ①座談会「現代書家小品展」

②書道講座(第二期の5)

③この作品をとりあげる

④書道芸術院報(会報)

【解説】(文中敬称略)

25号(12月号)の次は1月号のはずだが、2月の発刊である。④の編集後記に「本号から隔月発行」とある。会員数が伸びないのと、編集業務の負担の増加が原因。それまで、多少の遅配はあったが、担当者(編集・執筆・手本揮毫)の献身的な努力により滞りなく発行されてきたが、難しくなったようだ。外部の書壇での雑務や展覧会作品制作にも時間が取られるので致し方ないことだっただろう。

①は大阪阪急百貨店で行われた書展。その趣旨に「一般の人々に親しんでもらうために、どこにでも陳列できる小品を発表する」とあり、販売することで書人の地位を向上させようという狙いもあった。

たようだ。川崎梅村5万円、他の12名は1〜1万5千円で、書家仲間だけでなくフリーの人も購入したとの報告もあった。書作品は差し上げるものという一般常識への挑戦であった。

③は超条幅8行書きの蘭亭序全臨作品、全紙横の現代詩文作品が選ばれた。

【昭和35年の「書道芸術」】

内容を縮小したくはない、充実した紙面を読者に提供したい、という思いから、やむなく隔月発行の形を選んだ編集部であったが、状況は好転せず、この年の発

現代書家小品展より2点



小島 白洲

刊は2月、4月、7月、10月の4回にとどまってしまった。30号を前にして、機関紙の存続危機が現実のものとなり、幹部による読者獲得の活動が精力的に続けられた。

〔4月〕第13回書道芸術院展・二科の報告。会員氏名一覧掲載。会員129名、準会員196名、会友135名。

〔7月〕高校の芸術科必修についての報告(上條信山)。北京での日本代表作家展の報告。

〔10月〕毎日展と前衛書展の報告。書道芸術院展の審査員候補は月例競書について「師範部」として規定部以下の5部門に出品する形に改正。(ただし、研究部には出品できない)



岡田 米峰

礼器碑（後漢156年）②

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみ可）

漢字研究部臨書課題

Ⅱ（半紙普通判・縦使用）左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ（A大作部 毎日展覧会員・会費サイズ以内、2×6尺、全紙も可）
（B小品部 半切以上半切以内、全紙以内も可）（A・B縦横自由）
当該古典の左記掲載部分以外も可。

※掲載図版85%縮小（原寸にするには118%拡大）



居魯親里。并／官聖妃。在安／樂里。聖族之

（三井記念美術館蔵）

〈解説〉『礼器碑』の書き方の要領を、上田桑鳩『書道入門臨書篇（創元社）』に拠って示す。

- ・筆は剛、軟どちらでも中鋒くらいが書きよい。
- ・筆の構えは直立に近い側筆がよいだろう。
- ・運筆はやや速く活発にし、緩急をつける。
- ・字形は扁平な四角にまとめるのを基本とする。
- ・横画の収筆は、左から来た筆を止めるか、または放つかするだけ。
- ・縦画の始筆はたいてい筆を垂直に入れていそうすることで、筆勢を出すことができる。
- ・拓本は、字が固く見えるから、肉筆のときの状態を想像して、生き生きした運筆をする。
- ・清らかでさわやかな気分を隷書で表現するのを主目標としたい。

（編集部）

古筆鑑賞

269

寛平御時后宮歌合
(伝宗尊親王筆)

②

特別研究部臨書課題

かな研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用) 別紙を裁断して貼付も可。
半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。左記の古筆の掲載部
分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

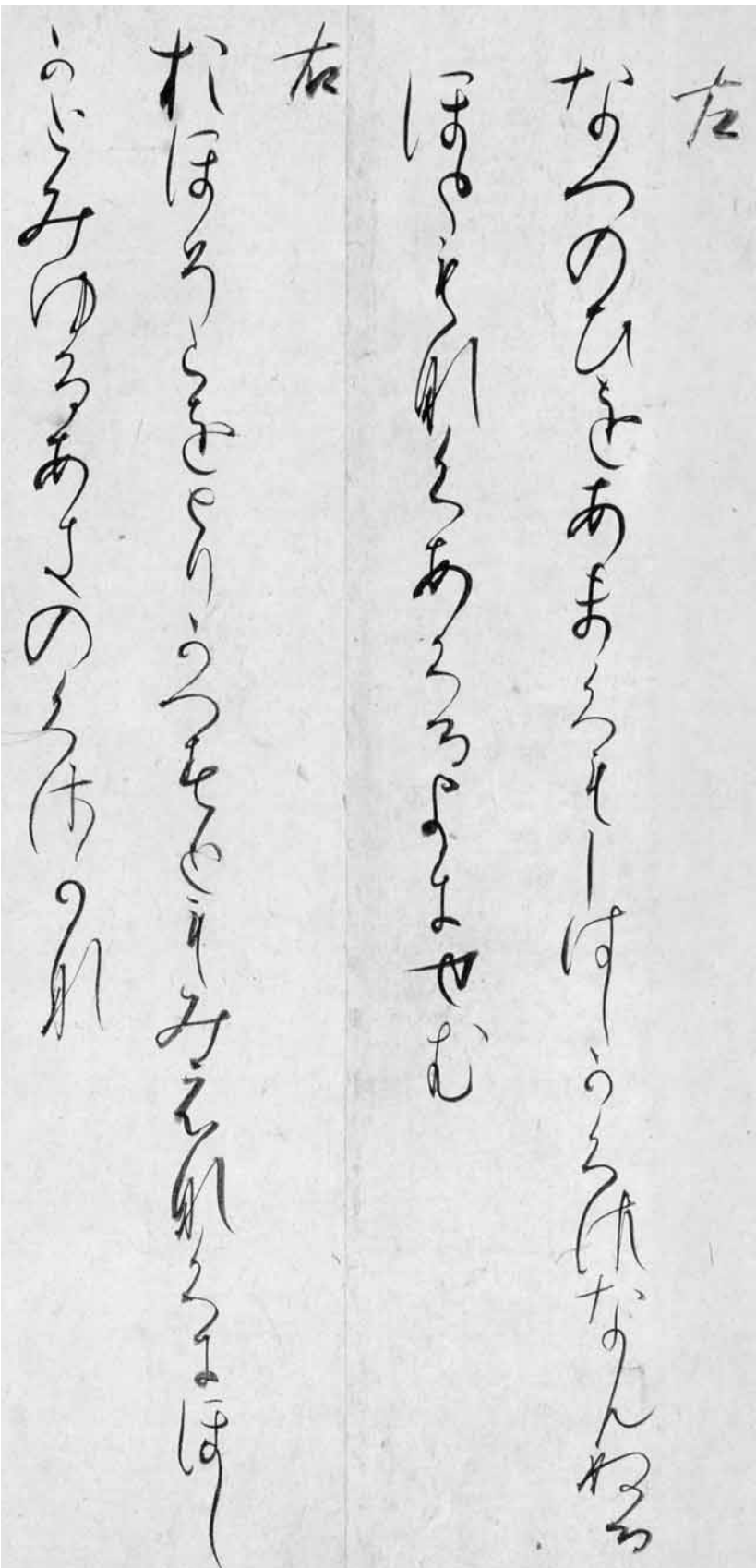
A. 大作の部 毎日展審査員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部 半切以上、半切以内(縦横自由)
へいすれも左記の掲載以外も可。V

へよみ

左／なつのひをあまぐもしばし^{可久佐}かくさなむぬる／
ほど^{毛那久}なくあくるよにせむ／
右／おほぞら^於をと^可りかへすともみえ^{毛那久}なくにほし／
かとみゆるあきのくさ^{支久佐}かな

〈解説〉今月の課題の図版は、左方が夏の歌、右方が
秋の歌で、季節が違うため本来はありえない配置であ
る。真ん中にうっすらと縦の線が見えているが、切り
継ぎの跡である。何らかの事情で途中の教首を切り取
り、残りをつないだことが分かる。

さて、書風であるが、同筆ないし同系統とされる古
筆は見当たらないようである。しいて言えば、高野切
古今集に似ているが、その第二種のようなでもあり、第
一種や第三種の字形に近いものもある。筆を立てるこ
とを意識してゆったりと運筆したい。(編集部)



※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

※古筆は原寸(以上も可)で臨書しまいよう。

東京国立博物館蔵

※掲載図版90%縮小(原寸にするには112%拡大)

漢字規定 初段以上 【9月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

習い方解説 (5)

名越蒼竹

室有藏書

(室に藏書有り)

〔四言句〕

門には俗用の人なく、室には藏書が多い、以て主人の人となり
がわかる。

「部屋には藏書が多く、(俗用の人もやって来ない。)」という意味です。心を高貴に保つ生き方を示しているのでしょうか。そこで書風を空海の書に求めてみました。

空海の書は重厚かつ気魄に満ちていて線の厚みが他の追随を許しません。用意の書はもちろん、卒意の書も軽薄な感じが全くありません。技巧面でも幅が広く王羲之と顔真卿の書の双方を深く学んだだけでなく、飛白体もマスターしています。

参考作は行書体で王法と顔法のミックスが感じられる風信帖の第一帖を意識して書きました。空海の書は字形が縦長のものが多く、右旋回で左下から右上に移る個所の筆圧が強い特徴があります。

室有藏書

よみ (室に藏書有り)

書体Ⅱ自由



漢字規定 秀級以下 【9月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

前田龍雲選書

習い方解説 (2)

前田 龍雲

公直無私

〔四字熟語〕

(公直無私)

自分の行いや言動を振り返り、自身の非や過ちを省みて反省すること。

そして公の職につく者は実直を旨とし、私欲で行動してはならない、自分の損得を考えたり感情に左右されたりしないの意。

屈強な雰囲気醸し出す北魏時代の造像記や墓誌銘の楷書筆法を参考に書いてみました。書法・運筆は、方筆です。鋭角的な起筆、右肩上がりの力強い結体、構成が特徴的です。起筆を強く打ち込み送筆は伸びやかに、呼吸を整え一気呵成に書き上げると歯切れよい線質になります。途中で邪念が入ると線がふらつくので、精神統一が必要かもしれません。弾力性に富む鬣毛の筆を使用しました。



公直無私

よみ (公直無私)

書体Ⅱ楷書に限る

かな規定 初段以上 【9月15日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

下谷 洋子 選書

習い方解説 (2)

下谷 洋子

こすみ
濃き墨のかわきやすさよ青嵐 あをあらし

〔橋本多佳子〕

書をしたためようと墨を濃く磨る。外を見ると一面濃い緑である。日中のさわやかな風がすぐ墨を乾かしてしまう。

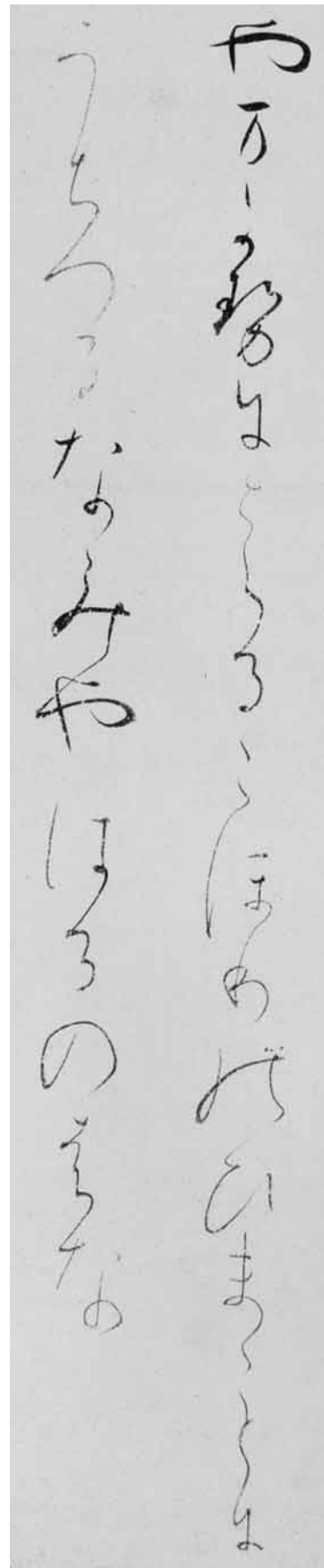
今回の俳句は歌1首書く時より、やや太目の筆を用いています。臨書と同じ筆では線が貧弱になりますよ。例にもれずかなの学書にも常に臨書が必要です。昭和50年代に、「現代臨書体系」（小学館）が発刊されました。臨書を写実的・印象的・表現的の3つに分けてその方法が実践されています。印象的・表現的臨書とは古筆の線や形に主観を加えて書くことです。当時の名だたるかな作家が挑戦した表現は、今日でも大変勉強になりますから是非ご覧下さい。簡単にはいかない難しい学書法ですが、かなの臨書＝原寸という神話だけでは現代の多様なかな表現には適応できません。このような臨書法は自己を磨くためにも必要だと思います。

よみ方 濃（こ）き墨のかわき（支）やすさよ青嵐

創作

*料紙は半紙版（33.0×24.5cm）を使用しましょう。半懷紙は上記のサイズに切って下さい。

かな規定 秀級以下 【9月15日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)
掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。高野切第一種 (掲載写真原寸)



よみ方 やま^{万可勢}かぜ^久にとくるこほりのひま^{利能}ごとに
うち^{脱が}(い)づるなみ^美やはるのは^者な^尔

歌意 山から吹く風によってとける水のすきまのひとつひとつからあふれるように吹き出す水こそが春の初花なのでしょうか。

かな条幅規定 【9月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

見越雪枝選書



よみ方 吹(ふ)き(支)ま(満)よふ(布)野風を(平)さ(沙)むみ(身)

秋は(者)き(幾)のうつ(徒)りも(毛)ゆ(遊)く(久)か(可)人の心(こゝろ)の(農)

創作

※タテ形式に限る

習い方解説 (2)

見越雪枝

吹^ふきまよふ野風^{のかせ}をさむみ秋^{あき}はぎのうつりもゆくか人の心^{ひとこころ}の

〔常康親王「古今集」〕

野風の寒さに変わっていく萩だが、萩だけではなく人の心も変わっていく様を詠んだもの。

暑さが苦手のため、気分だけでも涼しくなるように、秋の訪れを意識した歌を選びました。

文字の太細、大小も極端にならず適度な度合でお願いします。

墨継ぎは「ゆ」(遊)です。

漢字条幅規定 初段以上 【9月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

習い方解説 (5)

種谷萬城



青山横北郭 白水遶東城 此地一爲別 孤蓬征萬里
(青山北郭に横たわり 白水東城を遶る 此の地一たび別れを為し 孤蓬万里征く)

書体Ⅱ自由

今月は、李白詩『送友人』の前半4句を草書で書きました。草書は省略が進んだ書体で、ちょっとした点画の違いが誤字につながります。字書で調べる際には、標準的なものと、特異なものを識別することが大事です。今回は標準的な字形を単体で用いました。王羲之、智永、孫過庭、懷素、黃庭堅、王鐸、傅山等が草書の名家です。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 秀級以下 【9月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大平邑峰選書

習い方解説 (5)

大平邑峰



醉來信手兩三行 醒後却書不得
(酔いに來り手に信す 両三行 醒めて後却って書するも書し得ず)

書体Ⅱ自由

今月は、褚遂良の枯樹賦をイメージして書作しました。同じ褚遂良の哀冊とはかなり印象が異なります。絞り上げたような細い線と、醸し出されるしみじみとした味わいを表現に取り入れたと思います。筆先の微妙な動きを手で感じながら、呼吸が長く、粘りのある運筆を心がけました。楷書の雁塔聖教序も参考になります。

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えし時
前にせしたる花櫛の
花あり君と思ひけり
藤村の詩 美泉書

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

書体＝自由

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(ハガキ大14.8×10cm)を守って下さい。

習い方解説 (2)

川村美泉

島崎藤村の詩「初恋」の冒頭です。明治29年(1896)に発表された『若菜集』に収録されています。初めてこの詩に出会ったのは高校生の頃。淡い恋心を詠んだ繊細な感性と描写の美しさに心を動かされたことを憶えています。

また、詩ではありませんが、「今日まで自分を導いてくれた力は、明日も自分を導いてくれるだろう」の藤村の言葉に最近、感銘を受けました。今日を諦めず、明日を生きる、諦めなければ道は開ける、という前向きなメッセージに力をもらいます。

さて、話が飛びましたが、「初恋」の七五調のリズムに合わせ、軽やかにペンを走らせてみましょう。

「めし」「えし」「さし」と同じ形で連綿を書きましたが、それぞれに工夫をされてみてください。

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えし時
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり
藤村の詩 ○○書

残暑お見舞い
申し上げます

朝夕は涼しさを感ずるようになり
また近いうちにこちらにいらっしやい
ませんか積もる話もございますので

長島 僊雨

残暑お見舞い／申し上げます／朝夕は涼しさを感ずるようになり／
ました近いうちにこちらにいらっしやい／ませんか積もる話もございますので／氏名

書体＝自由

(掲載手本85%に縮小。原寸にするには117%拡大)

- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の氏名(号)を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る

ペン字部 師範 菊池喜美子

漢字とかなが自然になじんで歌詞が心にやさしく流れてきました。題名、落款のバランスも良い。
◎ペン字部総評 個性的なペン字作品、楷書の作品も興味深いですが、まずはかな文字の基礎が必要なのですね。
(白露評)

漢字条幅部 師範 安藤 美悠

流麗な線が紙面を自在に巡り、豊かな余白と響き合って気韻を生む。伸びやかで格調高い作。



◎漢字条幅部総評 伸びやかな行草表現が多く見られ表現の充実がうかがえた。篆隸は字形の典拠を究めることが大切。

(蒼玄評)

かな条幅部 師範 関口やよえ

流麗さあふれる3行の散らしが魅力的。余白の動きが、作品全体を引き締め、豊かな景色を作った。

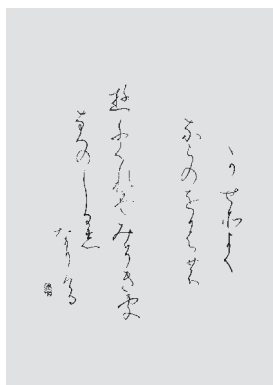


◎かな条幅部総評 墨色、潤濁は

何よりも重要です。紙、筆との相性など色々と工夫して、より景色のある作品を志しましょう。(孝子評)

かな部 師範 沼田 奎心

寸松庵色紙の構成で高野切風の做書に着目した。連綿法も適切でよいが、字粒小さく線が細かった。
◎かな部総評 字粒の大小のバランスが取りにくかったようで調和を欠いた作品が多かった。上段者は是非料紙で書きましょう。(洋子評)



前衛書部 特選 高山 琢翠

ミステリアスなきっぱりとした創意がうかがえ、これから期待します。

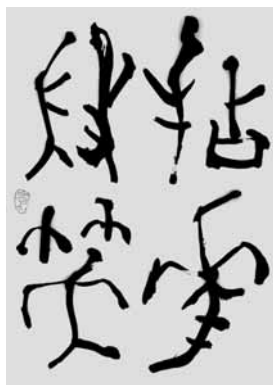


◎前衛書部総評 様々な用具、

材の使用で一段と表現力豊かな作品多く、感動しました。(慧香評)

漢字部 師範 堂園 慶子

全ての筆画、一本として単純な線なく入筆、運筆、終筆に味を感じる。墨色も良くリズムある作。
◎漢字部総評 さすがに師範は大胆な作品づくりが目立った。一つの作風にこだわらず常に挑戦して下さい。
(翠嵐評)



現代詩文書部 特選 橋本奈緒子

かなの散らし風に文字を配置。大小、太細、墨量の変化が絶妙でスッキリした作品に仕上がった。



◎現代詩文書部総評 味わい深い

作品が増え、審査しながら心がなごむ思いであった。(邑峰評)

前衛書部(特選)

現代詩文書部(特選)



荻江 裕子 淡墨の線が紙面を舞う
 由香 余白を前提に紙面広げた
 四流 淡墨の世界を満喫印も良
 桃翠 運筆が誘いリズムが出た
 修子 気ままな感じに仕上げ良
 敦子 思いついた軽妙さに驚く
 奎山 思いついた技術が光る
 二子 思いついた豊かさを感ずる
 恵弦 センスの豊かさを感ずる
 意表をつく構成が見事
 森 意表をつく構成が見事

貴子 大胆な文字構成が斬新
 竜之介 文字にオシャレさ求める
 千秋 大胆な文字構成が斬新
 睦月 大胆な文字構成が斬新
 悦子 大胆な文字構成が斬新
 振幅の大きい独特の運筆
 点にリズム感を求めた作
 隷書風に柔らかなさを加味
 大胆な文字構成が斬新
 文字にオシャレさ求める

葵龍 奇を衒わない作風に好感
 恭子 ゆったり大きく広がる作
 彩紅 響き合う文字群構成の妙
 里佳 優しい確かな運筆で貫く
 桃翠 大胆でリズムのある運筆
 英雄 筆の開閉を楽しんだ作
 雄一 ゆったりした運筆に好感
 雅秀 大胆な文字構成余白美し
 邦秀 細線が独特のリズム佳
 梨和 一貫した味わい深い線質
 雅悠 筆の開閉を楽しんだ作
 山房 線の鋭さと豊かさが調和
 香燐 用墨成功し味わいを表出
 成山 大きい動きで白黒冴える
 陽子 ニジミの美しい淡墨作
 文字の大小の変化成功

選評 大平 邑峰

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 小竹石雲 千葉蒼玄 半田藤扇 小島孝予

臨書 (清月) 境野和子 「粘葉本和漢朗詠集」

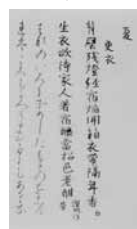
◆素直で温厚、高い品格の、清麗な作品です。細線が伸びやかで明るい。日頃の積み重ねの成果を感じます。
(孝予評)



境野和子 臨

35×136cm

部分拡大



前衛書 (大阪)
湯原希風
「母子」



135×35cm

◆淡墨と濃墨を巧みに使い分け、奥行きと立体感を生み出している。墨色の対比が作品に深みを与え、豊かな空間表現を実現した。
(蒼玄評)

現代詩文書 (宗苑)
茂木絢水
「原民喜の詩」



135×35cm

◆墨の潤濁を意識的に対比させ、左右の余白を効果的に配し、明暗を鮮明にした作品である。現代的な意志力が重厚でよい。やるせない現代社会へのメッセージを感じる。
(石雲評)

漢字 (粹仙)
藤井龍仙
「長樂萬年」



53×58cm

◆文字の造形・多彩な線質との響き合いがうまく表現されている。線の重みと深さ、筆勢の切り返し、また、躍動が魅力的な作。
(藤扇評)

藤井龍仙書

小品の部

〈小品の部〉

総出品点数
78点

創作の部(40点)

漢字 9点

かな 4点

現代 17点

篆刻 1点

前衛 9点

臨書の部(38点)

漢字 29点

かな 9点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕 水茎 高岡 秀汀

麗澤 長谷川 翠

〔かな〕 伊呂 齋藤 杏邑

〔現代詩〕 植松 梅田 紅雨

玄穹 千葉 陽子

AI 清水 由紀子

四枝 那須 葉子

〔前衛〕 宮古 長澤 紅苑

秀水 坂井 初江

〔篆刻〕 蒼原 庄司 櫻空

〔臨書の部〕

〔漢字〕 千葉 佐藤 桂香

大雲 江本 興舟

澄春 土屋 恵仙

八街 十河 春景

京橋 豊嶋 永寛

華祥 岩淵 俊雄

多賀 岡部 藤 苑

〔かな〕 齋藤 松 苑

うる 篠原 楊流

菊月 新井 恵子

大作の部

現代詩文書 (四枝) 大友四峰「鎧のごとく」



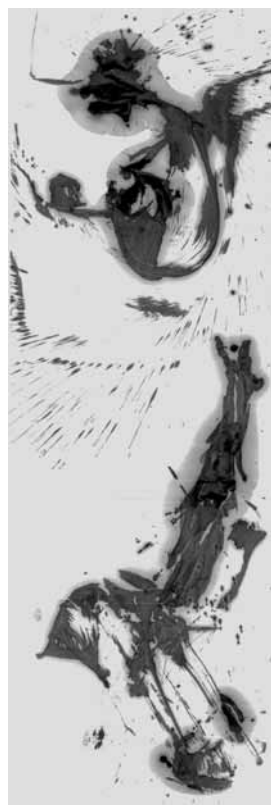
大友四峰書

60×180cm

◆前半をやや抑え気味に入り、徐々に盛りあげつつ縦横に展開させた動きと、軽重の変化のある線がうまく溶け合った力作である。
(石雲評)

前衛書

(花菱) 高橋清琳「夏至」



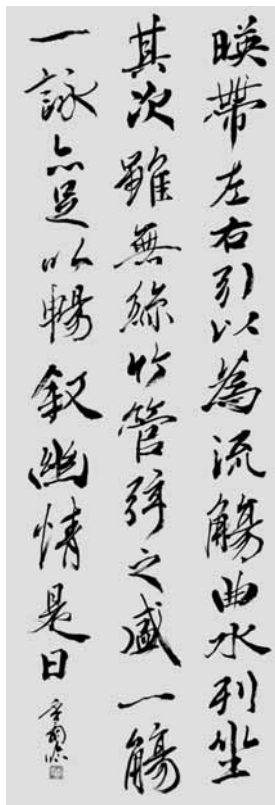
高橋清琳書

180×60cm

◆上部から下部へと展開する流れが鮮やかで、躍動感に満ちている。墨色の美しさも作品の魅力を高め、豊かな表情を生み出している。
(蒼玄評)

臨書

(大雲) 宮原香扇「蘭亭叙」

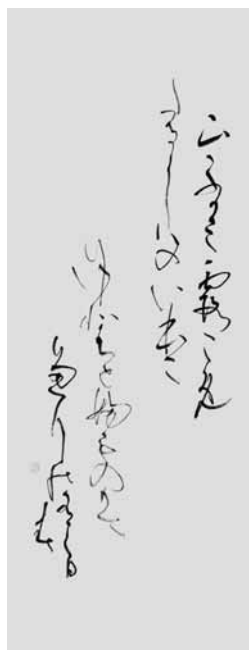


宮原香扇臨

180×60cm

◆緩急抑揚のある格調の高い作である。のびやかな躍動感にあふれた自然のリズムの表現がすばらしい。見応えのある秀逸作。
(藤扇評)

(愛子) かな 佐藤あこ「山ちかみ」



佐藤あこ書

136×53cm

◆墨の潤濁と絶妙なりズムによって紙面いっぱい若々しく華やかな世界が広がった。大変印象深い作品です。
(孝子評)

〈大作の部〉

創作の部(45点)

漢字 7点

かな 4点

現代 12点

前衛 22点

臨書の部(18点)

漢字 18点

かな 0点

総出品点数

63点

〈特選候補者〉

〈創作の部〉

「漢字」

八街三浦 麗川

杏苑 松永 杏苑

秀恵 阿部 雅悠

誠和 石崎 甘雨

「かな」

創珠 阿部 珠翠

「現代詩」

大雲 奥村 美楓

花壁 高橋 奎媛

翠柳 加藤 紫翠

宗苑 白井 真理

「前衛」

紅瑠 川田 弘子

蒼原 佐藤 奎山

光風 千葉 光泉

月華 相馬 朱郷

蓮紅 小野 赤紅

容洲 阿部 邑里

月華 浅野 涌翠

「臨書の部」

「漢字」

紅瑠 相澤 敦子

大雲 舟實 恵美

素朴 坂本 素朴

澄春 新行 芳蘭

華祥 玉淵 良章

漢字研究部
(蘭亭叙)

選評 児 玉 頼 光

今月のホープ作品



鈴 木 睦 心

◎漢字研究部総評

漢字研究部 特選 鈴木 睦心
鋭い線で、遅速・太細を考慮し、バランスのとれた堂々とした臨書作品です。日頃の学書に取り組む姿勢が伝わってきます。さらに課題の古典を全臨して、味わいのある心に響く作品づくりをすることを期待しています。

大事ですが、筆の使い方(特に穂先)を身に付けることです。指導者に書いた作品を添削してもらっただけでは、その時は理解しても、いざ自分で書くときから分らないという経験をされていると思います。指導者の手本を書いている姿をスマホ(動画)で撮影して、穂先がどんな動き(回転など)をしているか見抜くことです。何度も見ながら練習すれば必ず上達します。



遊 叙 成 光 洋
孝 心 華 子



千 麗 恵
代 子 光 子
春 香 梨 枝
柳 秀 子



久 史 菊 理 恵
悠 子 枝 子 美
恵 子 枝 子 美



徳 藤 里 青 春
美 舜 佳 霞 汀 子
千 恵 子

審査会員の部 結果発表 (出品数 漢字30点・かな12点)

選評 西川 翠嵐・下谷 洋子

漢字秀逸作



白井 真理



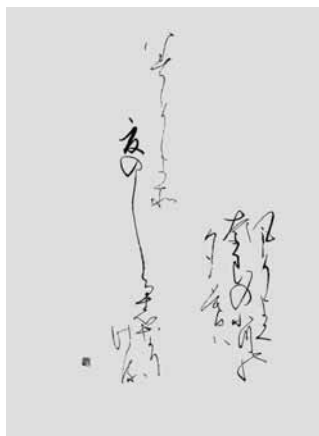
伊澤 香雨



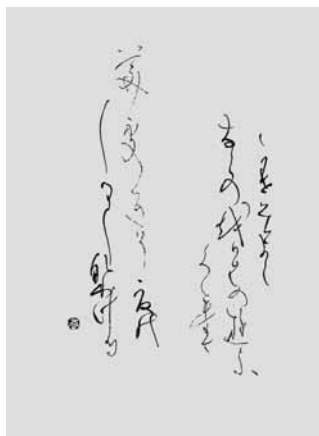
新行内芳蘭



板橋 雅邦



千葉 華紅



清水 蘭舟

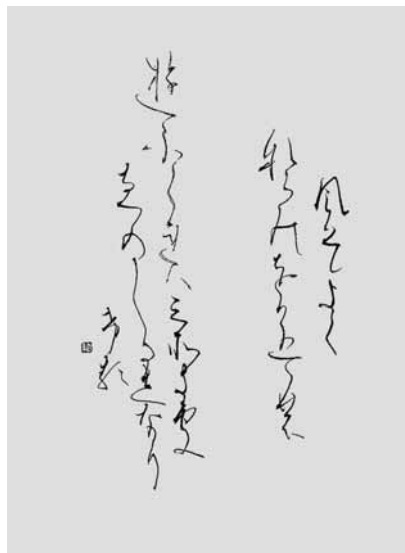
〈次点・50音順〉

畠
中
成
山



強烈な自己主張、まず「華」の字の結体に目を奪われました。偏旁のゆずり合いもはっきりして躍動感あふれる作品となりました。(翠嵐評)

かな秀逸作



茂
木
絢
水

散らしも字組も一般的だが、古筆で鍛えた線質で群を抜く。今回は斬新な作品が多く頼もしかったが、デフォルメ、行間の疎密や太細など行き過ぎは品を欠く。(洋子評)

(公財)書道芸術院 連立個展 「次世代をになう隼たち」 報告

令和8年7月14日～19日
セントラルミュージアム銀座

幹事 広瀬舟雲

下谷理事長発案による、(公財)書道芸術院・連立個展「次世代をになう隼たち」(略称・隼展)が、令和8年7月14日(火)から19日(日)まで、セントラルミュージアム銀座において開催された。本院の次世代をになう50歳後半から60歳代の本院審査会員で、かつ毎日書道展審査会員の16人で構成、各々6メートルの壁面を用いて複数以上の作品(大作・軸・小品など)を制作・陳列することによって、自分の世界観を表現・発表するという、本院初の試み、新機軸の展覧会である。「隼」は狙いを定めると新幹線よりも早く急降下し目標の獲物をキャッチする鳥である。隼のごとく次世代に向けて励みたいという思いから「次世代をになう隼たち」としたのであった。

一般的な書展は、一人1作品の出品だが、今回のように複数の作品を一堂に展示するのは初めての人もいえる。少しでも将来の単独個展開催を目指し、どのような作品をどのように組み合わせたら効果的になるのかという知識を学ぶ良い機会となったことと考える。幹事・広瀬舟雲、庶務・パンフレット佐藤菜扇、葉書ちらしデザイン・前田龍雲、目録名票・松浦錦扇が担当した。葉書のデザインが目を見張る斬新なものとなる。今回は作品集ではなく、各自第一作品のみを掲載したオールカラーのパンフレットを制作し来場者に配付、

どちらも好評であった。連立個展なので連続した各6mの壁面16ブースを図面上で作成、理事長・常務理事の先生方に全16点の第一作品の陳列位置を事前に決めていただいた。この陳列案により、開幕前日の13日(月)10時から陳列開始し13時にはすべて完了できた。普段の公募展にはない、ゆったりとした陳列で、初の展覧会なのでとても緊張し、全員これでもかというぐらい気合を入れて書き込まれていたが、隣の商品と不調和となることがなく、書道芸術院らしい豊かにかつ上品な調和を保つことができた。

その後、15時から内覧会、16時から17時30分まで毎日新聞社・毎日書道会・本院理事などの役員・報道機関の方々等をお招きし会場内で、第1部三浦、第2部大内・大沼、第3部大平・鈴木の司会進行で、ささやかながら和やかな祝賀懇親会を行うことができた。ご来賓の方々の叱咤激励の言葉を胸にさらに精進していきたいと考えた。

さりげなく蟻の軌跡を縁に入れ真剣に紙面に対峙する大平邑峰、書表現に新しさを求める大内熒軒、筆力を存分に発散させる朝倉希代子、うねりと飛沫の凝縮する一條紅蕭、金文を操り刻す大沼樵峰、西行に惹かれた新鮮かなの九條純代、サグラダファミリアを見た感動を表す工藤永翠、金文を昇華しゆらめく縦線の群像美となす佐藤菜扇、潤渾と発散の空間美に挑む前田龍雲、愛する山への賛歌を表す鈴木英晴、

行書の伝統に新鮮さを注ぐ中尾零麗、重厚に筆が舞う三浦鄭街、象形の妙味を表出する松浦錦扇、方形の紙面にかかなる生命を吹き込む小島孝予、多字数士の雄姿を書とする広瀬舟雲。本院の特徴である漢字・かな・現代詩文・篆刻刻字・前衛の5部門を網羅した展覧会となった。一同感謝の気持ちでいっぱいである。



〈大観の富士〉180×279cm

広瀬 舟雲



〈蟻の大軍〉180×385cm

大平 邑峰



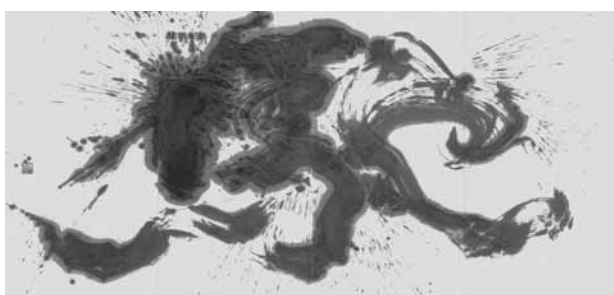
〈銀波〉 180×270cm 一條 紅蕭



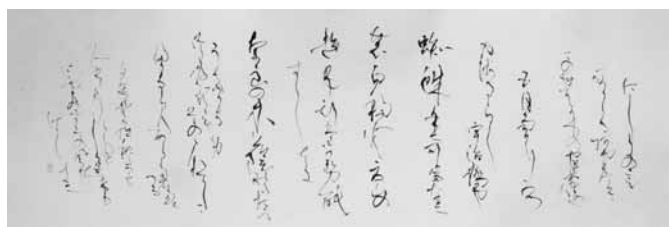
〈射石為虎〉 (180×90cm) ×2
大内 熒軒



〈塵不動〉
70×105cm
大沼 樵峰



〈馳〉 180×360cm 朝倉希代子



〈西にのみ〉 60×180cm 九條 純代



〈栄光のファサードへのオマージュ〉
240×290cm 工藤 永翠



〈玄遠〉 180×270cm 前田 龍雲



〈飯豊連峰の姥権現〉180×240cm
鈴木 英晴



〈風神雷神〉160×280cm 佐藤 萊扇



〈まされる宝〉140×135cm
小島 孝予



〈若草山眺望〉104×265cm 中尾 琴麗



〈鄭街・座右の銘〉(177×90cm) ×4
三浦 鄭街



〈邁〉180×270cm 松浦 錦扇



〈大和物語より〉(26×242cm) ×2 見越 雪枝

院報

審議事項

①第80回記念書道芸術院展関係人事について

令和8年6月21日(日)に通常理事会を東神田の書道芸術院事務所に開催しましたので、その概要を報告いたします。

5月の理事会からこれまでの昇格者、退会者、除籍者、逝去者について報告があり、承認された。

②運営委員長、実行委員長等について

書道芸術院展の運営委員長に下谷

議案第1号 理事長の選任について

下谷洋子理事を推薦する発言が議場からあり、審議の結果承認された。

議案第2号 常務理事の選任について

小竹石雲理事、千葉蒼玄理事2名を下谷理事長から提案し、審議の結果承認された。

議案第3号 顧問の選任について

後藤大峰氏を下谷理事長から提案し、審議の結果承認された。

議案第4号 参事の選任について

新たに飯沼恵鳳、稲垣小燕、北村白琉、小林琴水、坂本素雪、津田海仙の6名を加え、計19名とすることで、審議の結果承認された。

議案第5号 総局長及び支局長の選任について

新たに東北総局長に飯沼恵鳳氏を推薦し、審議の結果承認された。

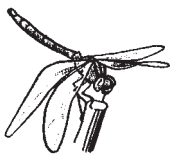
記念事業の概要、各事業担当となる常務理事と理事について説明し、承認された。

報告事項

①第77回毎日書道展出品状況について

書道芸術院の出品状況は、1,400点で昨年度より17点減少した旨を報告した。

②代表理事、業務執行理事の職務の執行状況の報告特になし。



◇夏季休暇のお知らせ◇

事務所の夏季休暇は

8月11日(火)～16日(日) とさせていただきます。

なお、休暇期間中の郵送物は、17日の午前中に事務所にまとめて届くようになっております。

よろしくお願いいたします。

公益財団法人 書道芸術院

硯上の里おがつ

玄穹社選拔展

○ 会 期

前 期 令和8年7月31日～8月16日

後 期 令和8年8月18日～9月6日

○ 場 所

道の駅 硯上の里おがつ

宮城県石巻市雄勝町下雄勝2-17

主 催 (一社) 硯上の里おがつ 玄 穹 社

第75回記念 玄遠社書展

●会期 令和8年9月15日(火)

～20日(日)

午前9時30分～午後5時

●会場 大阪市立美術館

天王寺ギャラリー第1室・第2室

〒543-0063

大阪府大阪市天王寺区茶臼山町1-82

TEL 06-6771-4874

●主催 玄遠社 (会長) 小林琴水

●後援 (公財) 書道芸術院

(一財) 毎日新聞社

〈新刊案内〉

島谷弘幸 著

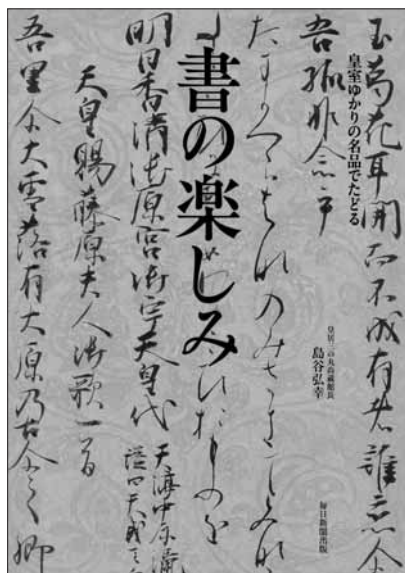
「皇室ゆかりの名品でたどる 書の楽しみ」

東京国立博物館副館長、九州国立博物館長を経て、現在は皇居三の丸尚蔵館長としての重責を担っている著者が、日本の書57点と王羲之の喪乱帖を美しいカラー写真で紹介し詳しい説明を付けている。その作品の書者や由来、伝世の経緯、書としての評価に加えて見どころを丁寧に解説してくれる。書の専門家はもとより、初心者にも親しみやすい平易な文体で、鑑賞の方法が理解できるようになっている。「書は読めなくてもいい」が「読めるともっと面白い」というのが著者の思いである。書を鑑賞するには知識はもちろん大切だが、その人なりの感じ方や視点が大切だと実感できる書物である。

なお、初出は毎日新聞の「書の美」「書の楽しみ」欄であるが、新たな書き下ろしも含まれている。

〈事務所より〉

この本をひとり1冊、差し上げます。はがきに「書の楽しみ」希望と書いて事務所までお送りください。締切りは8月25日(火)必着です。応募者多数の場合は抽選とし、当選者のみに着払いにてお送りします。送料はご負担願います。25部ほど用意しております。



書展

「書家二人展「暖」

石崎甘雨×大町菜園

に訪問して

千葉紅雪

会期Ⅱ令和8年6月16日(火)

21日(日)

会場Ⅱ弘重GALLERY／恵比寿

会期最終日の6月21日、大雨の石巻を早朝に出発し、一路恵比寿の会場を目指しました。東京ですすでに雨が上がり、会場周辺に咲くアジサイの鮮やかな色彩が印象的で、その彩りに背中を押されるような気持ちで会場へ入りました。

会場は弘重GALLERYの地下にあり、階段を一步步降りていく壁面にはすでに作品が展示され、細やかな演出が施されていました。

以前から注目している石崎甘雨さん



と大町菜園さんによる二人展。異なる部門で活躍するお二人がどのような作品を発表されるのか、そしてテーマが「暖」であることにも大きな期待を抱きながら地下の展示室へ足を踏み入れました。

そこには、甘雨さんと菜園さん、それぞれが築き上げた二つの宇宙ともいえる世界が広がり、会場中央に配されたタペストリーが、その二つの世界を穏やかに融合させているように感じられました。

テーマである「暖」には、境界が溶けゆく気配や、書の枠を超えた表現への挑戦が込められていたといえます。展示作品には、部門の枠を超えた試みや、日頃の臨書の積み重ねが随所に感じられ、お二人の書に対する揺るぎない姿勢と強い決意が伝わってきました。さらに、新たな表現への挑戦そのものを心から楽しんでいる様子もうかがえ、今後ますます活躍の場を広げていけることを期待するとともに、その歩みに引き続き注目していきたいと思っています。

第十二回蓮紅社書展

を拝見して

工藤永翠

会期Ⅱ令和8年6月12日(金)

15日(月)

会場Ⅱせんだいメディアテーク

初夏の清々しい季節の中、せんだいメディアテークにて開催中の、太田蓮紅先生主宰の第12回蓮紅社書展を訪れました。

展覧会会場に入ると、前衛書作品や、宮城を魅せる書の大作等、迫力のある作品群に圧倒されました。以前から蓮紅社中の方々の作品は、躍動感に溢れ、強い線質で書き込んだ感が伝わってくる書が多いと思いましたが、正に、この度の展覧会でも、魅力的でパワー満載の作品群に囲まれ、時間が静止し、感動の渦に入り込んでしまったようでした。

そして、蓮紅先生の斬新で宇宙的観点を表現した作品、さらに濃墨による漆黒を意識したような荘厳さ漂う作品に、新たな息吹を感じ、書に向かう強靱なエネルギーが伝わってきました。展示されている大作を初め、社中の方々の小作品についても、前衛書だけに限らず、漢字・かな・現代詩文書、表装にと多種多様な工夫がされて楽しく拝



会場風景

見しました。また、会場内に設置し惹きつけられたなんとも興味深いオブジェ、加えて、今後将来を担っていくであろう学生たちの素直で力強い作品等からも、蓮紅先生の先を見据えた熱い想いが伝わり、強く感銘を受けました。仙台滞在90分という短時間ではありましたが、とても充実し、心洗われる有意義なひとときでした。蓮紅社中の皆様のご活躍を祈念申し上げます。

「今回の毎日書道展の 公募審査の傾向と対策」

①漢字部Ⅰ類（名越蒼竹）

公募と会友の作品がともに「まくり」の状態で審査されたことは、大きな変更点でした。

1、「まくり」審査では会友にとって線質面のアピールが難しかったかもしれない。逆に言えば公募でも章法の優れた作品には有利に働いた可能性がある。

2、未表装であっても線質の良さがすぐ分かるものはやはり高得点であった。

3、線質と章法、どちらも大切であるが、線質の向上には時間がかかる。まずは章法を整えることを優先すべきではないか。

②漢字部Ⅱ類（大内榮軒）

鑑別審査を5月に1回で行った。Ⅱ類とⅠ類の文字数変更、大字書部と重なる字数もある。このような中で、1行書きの作品が多かった。規定違反は全く全て審査した。

多様な表現の作品が出品され、それ

ぞれの強み、良さを感じながら拝見した。

Ⅱ類の作品は、インパクトのある文字表現に主眼を置き、白と黒の比率を工夫してみよう。選文の時に画数の意識も加えて。

③大字書部（小林零水）

今まで5、6月に行った審査を5月

に1回で行いました。審査前に、会友、会公、一般作品をシャッフルして、鑑別審査入落、入賞まで、1回の挙手で、点数が決定という初の審査方法で行われました。大字書は淡墨が多いので作品と同寸法の厚手の紙を作品の裏において審査を行いました（墨色が裏打ちをしたと同様になることで）。審査副部長の池谷天外先生の、誤字作品は絶対に見逃さない。0点がないようにの発言でスタート。スムーズに動き始めて、予定通りの進行で4日間の審査は無事終了しました。

④かな部Ⅰ類（松村くに子）

かなⅠ類（多字数）の担当でした。

今回展からまくり審査です。マットの色や額の仕様での効果は期待できません。墨色の変化やポイント（盛り上りの箇所）の表現はより重要であると感じました。

小字の貼り交ぜと臨書作品が多くを占め、中字作品は少なかったです。特に、小字の貼り交ぜ作品は、貼り方や料紙の大きさなど工夫が必要であると思いました。

来年は、1枚ものの創作作品に挑戦してみてはいかがでしょうか。

⑤かな部Ⅱ類（小島孝予）

本年度から新体制となり、一般公募、会友公募、会友の180点全てをシャッフルして「まくり審査」を行った。作品全体の傾向は2×6縦、濃墨の散らし書きがやや多かった。「まくり」のため料紙は薄手より厚手、色はグレーなどの暗い色よりも明るい色また白紙の方が作品映えがした。濃墨で太字のインパクトがある作品や、細くても線質に張りのある作品など、生き生きとした景色のある作品は輝いて見える。やはり日頃からの積み重ねが大切だと痛感した。

⑥近代詩文書部（大平邑峰）

本年の審査は、鑑別と賞審査を一期で行うという方針に基づき、審査部と総務部の担当役員が綿密な審査計画を立て、粛々と進められた。作品は強くエネルギー感あるものから細字による叙情的なものまでバラエティーに富むが、本年の傾向としては、白と黒のメリハリがある余白の美しい作品、構成の工夫がありリズム感に富む叙情的作品が安定して点を伸ばした。詩文を通して書き手の思いが感じられる作品が受賞につながった。

⑦前衛書部（北村白琉）

今年の毎日展には、造形、墨色等に創意工夫のある意欲的な作品が多数出品されました。審査員12名による得点は5〜8点位が多く、満点はありませんでした。0〜2点もなくて良かったと思います。

作者名を見なくても社中名がわかってしまうというパターン化した作品が今年も目につきました。それぞれ独自の味のある作品を目指さなければと思いますが、なかなか難しい課題だと思います。

予 告

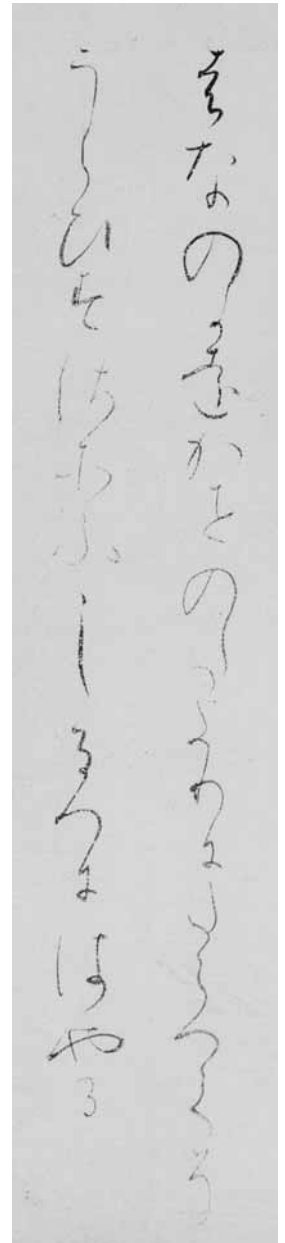
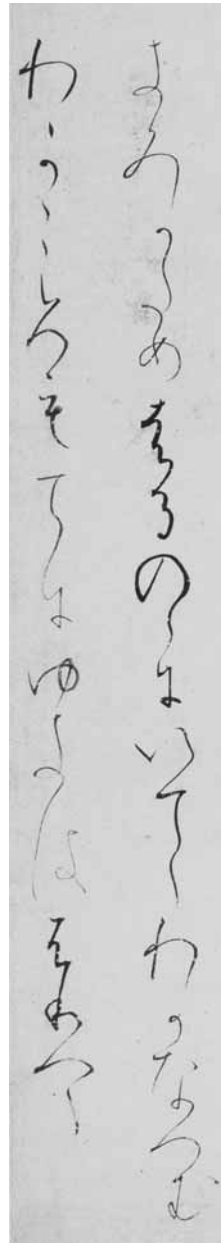
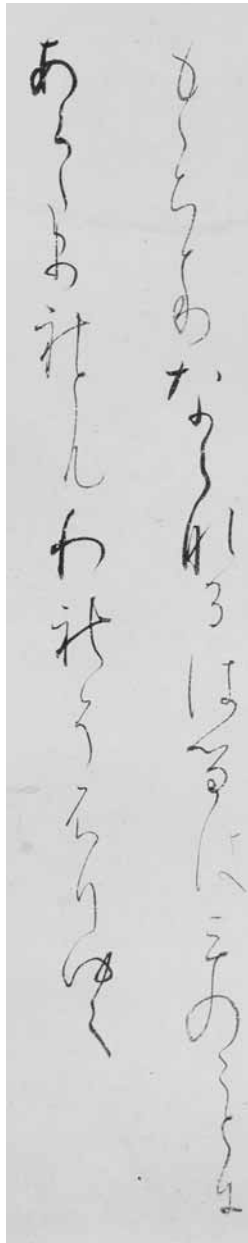
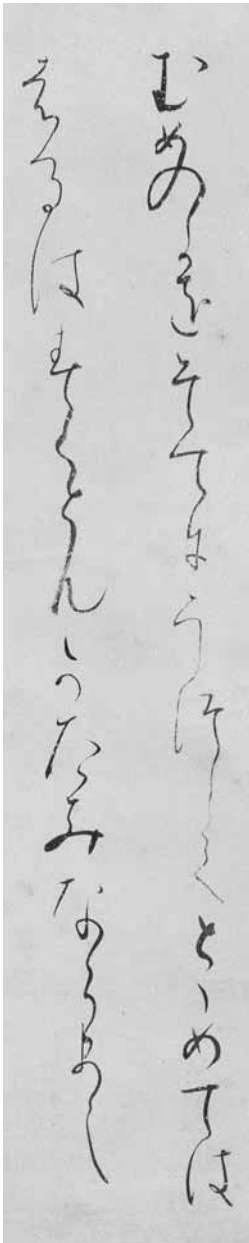
月例競書「かな規定 秀級以下」高野切第一種の課題

12月号
(1/15締切)

11月号
(12/10締切)

10月号
(11/15締切)

9月号
(10/15締切)



(掲載図版・68%に縮小。原寸にするには147%拡大して下さい。)

46 番歌
むめのかをそでにう
つしてとどめては
はるはすぐともかた
みならまし

28 番歌
もちどりなく久那
はるはものごと
あらたまれどもわれ
ぞふりゆく

21 番歌
きみがためはるの
にいでわかなつむ
わがころもでにゆき
はふりつ

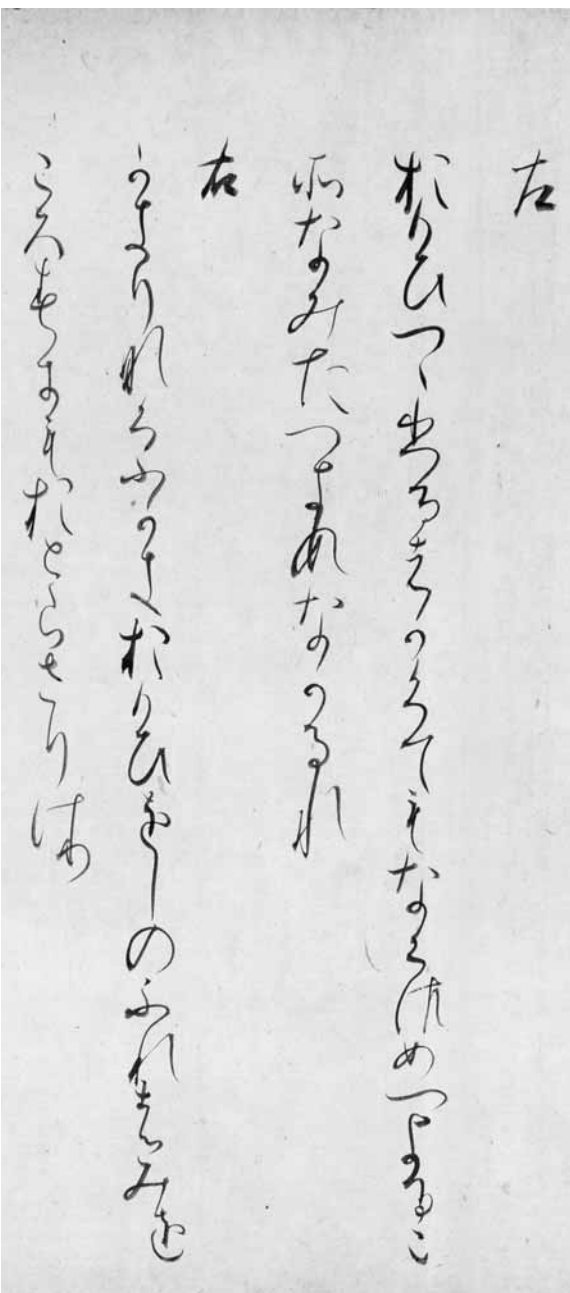
13 番歌
はなのかをかせのた
よりたぐへてぞ
うぐひすさそふし
べにはやる

古筆鑑賞

270

寛平御時后宮歌合 (伝 宗尊親王筆) ③

へよみ
左／おもひつゝひるはかくてもなぐさめつよるこ／そなみだつきずなかるれ／右／かぎりなくふかきおもひをしのぶればみを
／ころすにもおとらざりけり



(掲載図版・60%に縮小。原寸にするには167%拡大)

古典鑑賞

496

礼器碑 (後漢156年) ③



(掲載図版・55%に縮小。原寸にするには182%拡大)

高
眇
高
五
百
穎
川
長
社
王
玄
君
眞
二
百

特別昇段級試験

一、しめきり日 9月15日(火)

秋季は、作品募集を次のようにいたします。

漢字 一種、二種、三種
かな 一種、二種
漢字条幅 一種、二種
かな条幅 一種、二種、三種
ペン字 一種、二種、三種
かな、漢字条幅の三種は、春季募集となります。

二、応募資格

・一人で幾つの部にも応募できる。

・第一種

現段級が特級、10級、新規

・第二種

現段級が初段、3級

(4、10級の方は受験できない)

・第三種

現段級が準師範、秀級

(優級以下の方は受験できない)

三、課題文字と用紙

(創作文字は新旧字体どちらでも可)

※漢字・かな・漢字条幅・かな条幅の臨書作品は、6月号48、53ページの写真掲載の中から(指定文字数)を臨書。

漢字部

半紙、たて長に使用

第一種(1枚)

楷 臨書 高貞碑(掲載部分から5文字を臨書)

第二種(楷・行 計2枚)

楷 創作 暗飛螢自照(杜甫)
(暗きに飛ぶ螢は自ら照す)

行 臨書 集字聖教序(掲載部分から12文字を臨書)

第三種(楷・行・草 計3枚)

楷 臨書 雁塔聖教序(掲載部分から細字24文字を臨書)

行 創作 竹涼、侵臥内

草 臨書 野月、滿庭、隔(杜甫)
(竹涼臥内を侵し野月庭隔に満つ)

かな部

半紙、たて長に使用

・料紙可、各臨書は料紙を裁断して貼り付け可。

・かな部創作・臨書はともに落款は印のみ可。

・かな・漢字の変更自由。

第一種(臨 1枚)

臨書 高野切第三種

(半紙1枚に2首を臨書)

第二種(臨・創 計2枚)

臨書 関戸本古今集

(半紙1枚に全てを臨書)

創作 音もせで思ひに燃ゆる虫こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ(源重之)

漢字条幅部

小画仙紙半切、たて長に使用

第一種(1枚)

(楷または行)

創作 水宿鳥相呼(杜甫)

(水に宿る鳥は相呼ぶ)

第二種(楷・行 計2枚)

楷 臨書 顔勤礼碑(掲載部分から14文字を臨書)

行 創作 草木百年新雨露

車書萬里舊山川(邵雍)
(草木百年新雨露車書萬里旧山川)

かな条幅部

創作は小画仙紙半切をたて長に使用(料紙可)

・かな条幅部の創作・臨書の落款は印のみ可。

・創作は、かな・漢字の変更自由。

第一種(創 1枚)

創作 露涼し夜と別る花のさま(石井露月)

第二種(創 計2枚)

創作 松かげに鶏はらばへる暑さかな(芥川龍之介)

創作 我が舟は比良の湊に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜ふけにけり(高市黒人)

第三種(臨・創 計3枚)

臨書 関戸本古今集

(半紙横1枚に全てを臨書)

創作 旅寝して香わろき草の蚊遣哉(向井去来)

創作 吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は来にけり(源実朝)

→ 課題を変更してあります。

ペン字部

はがきの大きさ(40×100白紙)にたて長に使用。黒インク使用。

夜熱依然として午熱に同じ門を開いて小立す月明の中竹深く樹密なり虫鳴く処時に微涼有り是れ風ならず楊万里の詩 ○○書

第一種 楷書 (1枚)

第二種 楷・行 (計2枚)

第三種 楷・行・草 (計3枚)

四、名前のかき方

◎どの部も落款を入れる。

・創作は○○書、臨書は○○臨と書く。ただし、かな部・かな条幅部の創作・臨書いずれも印のみ可。

五、受験料

第一種 一、五〇〇円

第二種 三、〇〇〇円

第三種 四、五〇〇円

◇納入は昇段級試験用振替口座、または現金書留でお願いします。

六、審査結果と昇級

成績に応じて、次の通り昇段級させる。

第一種は、最高秀級まで

第二種は、最高二段まで

第三種は、最高師範まで

七、応募手続

1 出品票は、バーコード出品券を使用し、9月号(78号)の段級を記入(昇試出品券を貼付欄に貼る)。

一種は作品の右下に貼る。二種・三種は1番上のみ、作品の右下に貼る。

2 作品2枚以上ある時は、右上をホチキスまたはのりでとめる。

3 団体支部の方へは事務所から応募書類一式を送付する。

4 個人で受験希望の方は、はがきで申し込む。

5 受験申込み締切は8月20日(木)申し込み先

〒101-0031 千代田区東神田1-16-7 東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

書道芸術編纂部特別昇段級試験係

応募書類は9月1日以後に整理発送。送付された応募書類に必要事項記入の上、作品に添え応募する。

5

1

2

3

4

5

競書出品規定

※規定部・自由部・研究部は、月別出品券を貼ったバーコード出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※特別研究部は所定の出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※半紙は縦使用に限る。

※落款(印のみ可)を入れる。

●出品資格 高校生以上

●月例競書作品出品の心得

1、締切日必着厳守

2、月別出品券を貼付していないバーコード出品券は認めない

3、月別出品券のコピーは不可

4、(一)初めて出品のときは「10級」と書く

(二)「課題違反」・「落款なし」等の違反作品は審査対象外とし、違反作品として氏名を掲載します。

※▲印段級誤記入

※△印作品審査後着

*段級欄に記入する数字は、級位は算用数字1、2、3...

段位は漢数字 初、二、三...

で書いてください。

*級位の方は、出品する月の本誌(最新号)で成績を調査確認の上、級を記入してください。確認できないときは、現在級を書き「未調査」と明記してください。

●規定部(自分の段・級で出品)

部門	段級位	用紙	書体・内容
字	初段以上	半紙	創作(書体自由)
漢	秀級以下	半紙	創作(楷書)
な	初段以上	半紙	創作
か	秀級以下	半紙	臨書
漢字条幅	初段以上	半切	創作(書体自由)
かな条幅	10級	半切	創作
ペン字	10級	半切	創作

●かな、かな条幅部門は料紙使用可。

●研究部(掲載課題の臨書)

部門	用紙	内容
漢字研究	半紙	文字数自由
かな研究	半紙	歌一首以上を書く、全文も可

●掲載部分以外の箇所は不可。
●かな研究部門は料紙使用可。
●料紙貼りつけ可。

●自由部(段、級によらないもの)

部門	用紙	内容
前衛書	半紙	創作
現代書	半紙	創作
実用書	左記	書体自由

△実用書部門・出品規定▽

○用紙 半紙横 $\frac{1}{2}$ 24.5×16.5 cm、
B5コピー用紙 26×18.1 cm
も可。

○課題 掲載語句を書く。

○小筆、筆ペン、サインペンも可。

●特別研究部

●大作または小品のどちらかに1点出品する。

●詳細は出品票の掲載ページを参照のこと。

☆審査会員の部について

●「漢字部門初段以上」と「かな部門初段以上」に審査会員のみの出品できる部を設ける。

●バーコード出品券の段級欄に「審査会員」と記入する。

●通常の競書との重複出品は不可。

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

電話(03)3862-1954

FAX(03)3862-1957

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時の間に
お願いいたします。(土・日・祝日は休み)

送料

1か月の購読部数

1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上	送料免除

令和八年七月二十五日印刷
令和八年八月一日発行

定価 1部 七五〇円

編集兼 下谷洋子

発行人 株式会社リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

電話(03)3862-1195
FAX(03)3862-1195
振替 001501411350058

http://www.lincs.co.jp/shogi/